



# フリースクール研究におけるナラティヴ・アプローチの可能性： 多様性と流動性を考慮した新たな研究に向けて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-04-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 橋本, あかね メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00002889">https://doi.org/10.24729/00002889</a>

# フリースクール研究における ナラティヴ・アプローチの可能性 —多様性と流動性を考慮した新たな研究に向けて—

橋本あかね<sup>1</sup>

## 1. 本稿の目的

近年、フリースクールの全体像を捉え直そうという動きが高まっている。その背景の一つが、先行研究が蓄積されているにもかかわらず、そこで見出される知見に共通性を見出すことが困難なことである。佐川(2014)は、個々の研究が提示するイメージは必ずしも一致しているわけではなく、研究成果が蓄積されるにつれて支援者や当事者の多様性が浮き彫りになつていると指摘している(p.1)。

もう一つの背景が、フリースクールをめぐる制度化の議論である。この動きは、2009年にフリースクールのネットワークの一つであるNPO法人フリースクール全国ネットワークが『フリースクールからの政策提言』を出したことに端を発する。これをもとに、フリースクール等の関係者による新法の骨子案づくりが始まった。市民の動きとは別に、2014年6月、超党派による「フリースクール等議員連盟」が発足し、翌2015年には「多様な教育機会確保法(仮称)案」が提案された。こうした動きを受け、文部科学省は同年3月、初のフリースクール等に関する実態調査を実施した。他にも、藤根・橋本(2016)、小桐間(2016)など複数の調査が実施され、フリースクールの実態を量的に把握しようとする試みが活発化した。

しかし、量的調査でその全体像を明らかにするには限界がある。たとえば、藤根・橋本(2016)は量的調査の結果から、「フリースクールを名乗る組織の理念や実践は多様」(p.94)であることを示し、その多様な内実にどのようにアプローチしていくかを今後の課題としている。もちろん、量的調査の項目や分析方法を改良することによりその内実に迫るという

<sup>1</sup> 大阪府立大学大学院人間社会学研究科博士後期課程（人間科学専攻）

方法もあるが、それとは別のアプローチとして質的研究を用いるという方法が考えられる。

本稿は、その前段階として、日本国内で刊行された各学会や大学の年報・紀要に掲載されたフリースクールに関する論文を分析することを通して、フリースクール研究の手法について批判的に検討し、今後の研究のための新たな視座を得ることを目的とする。

本稿の構成は次のとおりである。まず、日本においてフリースクールという概念がどのように普及し、使用されているのかを先行研究をもとに概観する。次に、先行研究がフリースクールの何を明らかにしてきたのかをその研究手法とともに整理し、成果と課題を明らかにする。これらを通して、今後のフリースクール研究に必要なナラティヴ・アプローチという新たな手法を導き出すことを目指す。

## 2. 日本におけるフリースクールという概念とその実践

### 2-1. 日本でフリースクールという概念が普及した過程と使用上の混乱

現在、日本においてフリースクールという言葉は一般的に用いられている。本節では、フリースクールという言葉が日本にどのように普及していったのかについて、その過程をたどる。その際、フリースクール概念が普及していく経緯をまとめた田中佑弥（2016）を中心に論述していく。

田中によれば、日本にフリースクールが普及する契機は二つあったとされる。一つは、当時新聞記者であった大沼安史が欧米のフリースクールを取材してまとめた『教育に強制はいらない』（1982a）である。この本の中で、大沼はいわゆるフリースクール以外にも、小さな私立学校、壁のない公立高校、コミュニティー・スクール、学習ネットワークなど、多様な実践を紹介しているが、それらを大括りに「フリースクール」と総称している。また、全米のオルタナティブ・スクールの連合体である NCACS（National Coalition of Alternative Community Schools）を「全米フリースクール連合」（大沼 1982a:91）、PRAAS（Pacific Region Association of Alternative Schools）を「太平洋地域フリースクール連合」（同上：205）と訳すなど、

翻訳にも柔軟性がみられる。このような大沼の翻訳について、田中は「読者に馴染みがなく具体的なイメージを与えない alternative ではなく、比較的馴染みやすくイメージを持ちやすい『フリー』という語に意訳したのではないか」(pp.24-25)と推察している。

もう一つが、1983年、フリースクール関連の書籍を出版していた一光社を拠点に結成されたフリースクール研究会<sup>2</sup>である。この研究会には、当時の日本の管理教育に危惧を抱く人びとが参加<sup>3</sup>し、それへの批判が「フリースクール」に対する関心の前提となっていたとされる。また、研究会が発行する通信に寄せられた読者の関心が教育のみならず、人間や社会にも向けられていることから、「『フリースクール』をつくることが目的でなく、『フリースクール』を通じた人間のあり方の変革を志向していた」(p.25)と田中は述べている。このような志向性をもつフリースクール研究会結成の呼びかけ文を読み解いた田中は、フリースクール研究会においては、国内外の自由教育を包含する概念、あるいはこれらと隣接するものとして「フリースクール」が捉えられていた<sup>4</sup>とみた。ただし、「フリースクール」の定義に関しては、「明確な定義はなされず、当時の教育に対する批判軸になるものを広く意味する概念として『フリースクール』が用いられている

<sup>2</sup> 結成の呼びかけが行われたのは、1982年12月に発行された大沼安史著『続・教育に強制はいらない』に挟み込まれた呼びかけ文においてであったが、呼びかけ人の一人である一光社社長鈴木大吉は、同年2月に発行された『教育に強制はいらない』の出版を薦めた人物であった（大沼 1982a：278）。このことから、鈴木自身が従来の教育とは異なる新しい教育のあり方に関心をもち、それを広める場として、フリースクール研究会の立ち上げに関わったと考えられる。

<sup>3</sup> フリースクール研究会が発行していた「フリースクール通信」に目を通すと、会員の中には後に学校外に場を立ち上げた奥地圭子（東京シユーレ）、児島一裕（地球学校）、加藤邦子（野並子どもの村）、西山知洋（フリープレイスなわて遊学場）、西野博之（フリースペースえん）、辻正矩（箕面こどもの森学園）、星野人史（珊瑚舎スコーレ）、鳥山敏子（賢治の学校）らの名前があり、海外からはパット・モンゴメリー（アメリカ／クロンララスクール）も名を連ねている。また、堀真一郎（きのくに子どもの村学園）や、不登校と知的障害の子どもたちへの支援を目的に「子ども支援塾ネット」を立ち上げた八杉晴実、自己学習システム「らくだメソッド」の開発者である平井雷太などの名前もある。

<sup>4</sup> 「フリースクール通信」によれば、設立当初から狭義のフリースクールのみならず、シュタイナー、フレネ、日本の自由教育など様々な教育思想や実践に関する研究会が設けられていた（No.1、1983年6月13日発行）。また、月例会の内容も、「都市社会で人間は育つか」「なぜ自由の森学園をつくろうとするのか」「オランダの自由な教育」「いま、夜間中学で」「学校と塾と地域と」「小学校では、いま」など多岐に渡っており、ここからも会員の関心の幅広さがうかがえる。

た」(p.26)としている。

このように、欧米の「フリースクール」を扱った書籍と、「フリースクール」に関心を寄せる人びとによる研究会を通して、「フリースクール」は日本に普及していった。しかし、「フリースクール」という言葉が柔軟に運用されたために、学習塾や予備校、サポート校<sup>5</sup>、矯正施設<sup>6</sup>など様々な立場の人に濫用されることになる。

そして、そのような状況を憂慮した東京シューレ<sup>7</sup>は、2000年、『フリースクールとはなにか』を出版し、歴史的意義や実際の活動について発信することで、フリースクールという概念を明確化しようとした。にもかかわらず、フリースクールという概念は現在も明確になっているとはいえない。その背景の一つが、フリースクール研究における「フリースクール」という言葉の使用上の混乱にあるのではないかと考えられる。田中は、先行研究の多くが、無批判に大沼による「フリースクール」の捉え方や日本の独自の用語法を前提にしている点を批判している(p.31)。

他方、海外においてはフリースクール (free school) ではなく、オルタナティブ・スクール (alternative school) が一般的に用いられている。その理由について、吉田(2002)はヨーロッパ等では「Free」という語のもつ多義性を実践者が好まないことを挙げ、代わりに「Alternative School」や「Democratic School」が用いられているとする(p.2)。この点について、

<sup>5</sup> 通信制高校に通う生徒が3年間で卒業ができるよう、単位取得・進級などの支援を行う民間の教育施設のことである。通信制高校を卒業するには、レポート、スクリーニング(面接指導)、試験を通じて単位を取得することが必要だが、勉強を独学で行わなければならないため、途中で挫折してしまうケースや卒業までに長く時間がかかるってしまうようなケースが目立つ。そこで、そういった生徒を学習面、生活面、精神面でサポートすることを目的に設立されたのがサポート校である。運営は主に学習塾や予備校・専門学校などの教育関連の学校が行っており、それぞれの特色を活かしたノウハウで運営されている(通信制高校ナビHP)。

<sup>6</sup> 心身の鍛錬により不登校の克服を目的とする施設を指す。中には、入所者を死に至らしめた戸塚ヨットスクール(愛知県)や風の子学園(広島県、現在は閉鎖)のような施設もある。

<sup>7</sup> 1985年、親の会(不登校の子どもをもつ親たちの自主的な集まり)を母体として元小学校教師の奥地圭子を中心に設立された学校外の子どもの居場所・学びの場である。登校拒否を否定し、学校復帰を求める風潮に対し、子どもの成長は学校のみではないとの思いから、子どもの気持ちを尊重し、子どもを受け止め成長を支援する考え方や子ども中心の活動の輪を広げてきた(フリースクール東京シューレパンフレット)。

アメリカでフリースクール運動がオルタナティブスクール運動へと移行していく過程について考察した岩田（2015）は、フリースクール運動が公教育に対峙する性格を強くもち、そのことで自らの存在意義を示してきたのに対し、オルタナティブスクール運動は公教育との関係性の見直しや、どのような教育の形を目指すのかを意識するようになったと述べている。

このような海外における「フリースクール」という言葉をめぐる事情も踏まえつつ、本稿では日本の先行研究に着目する。

## 2-2. 日本のフリースクールにおける理念と実践の関係

### ——東京シューレの事例から

本項では、前項の議論を踏まえ、日本のフリースクールの草分けとされる東京シューレの事例を取り上げ、フリースクールにおいて理念と実践がどのような関係にあるのかを明らかにする。

東京シューレは元小学校教師の奥地圭子によって、1985年3月に「OKハウス」という名前で、だれでも自由にくることができるスペースとして始められた（奥地 1991：18-19）。当初はプログラムもなく、自由なサロンという形態をとっていた（奥地 1992：53）。しかし、子どもたちはなかなか集まらず、来ても数回でつまらなくなってしまって離れていってしまうという状況が続いた（奥地 1991：20）という。

そのような状況を受け、学びの場としてより多様な要求が満たされる必要を感じるようになった奥地は、同年6月、名前を「東京シューレ」に変え、新たな場としてスタートさせた（奥地 1991：23）。東京シューレの設立にあたり、奥地は次の二つの目的をもっていた。一つは、親として親の会の活動に関わる中で生まれてきた、「学校にこだわらない子どもたちの居場所」をつくるというものであり、もう一つが、22年間教師として子どもに関わる中で生まれてきた、子どもたちが「のびのびと、自分の意思と感性を大事にしあいながら、自らの成長力を発揮してやっていける場」をつくり出すというものであった（奥地 1992：48-51）。

では、奥地は具体的にどのような場をイメージしていたのだろうか。奥地の著作をさらに詳しくみてみると、「学校外の学びの場とはどんな内容であつたらよいかというとき、必然的帰結が、フリースクール的イメージ

でした。なぜなら、不登校の子たちが求める場とは、彼らをはじきだしている競争や管理のない、一人ひとりの個を認める自由な場のはずです」(奥地 1989 : 68) という記述が出てくる。つまり、「学校外の学びの場」の具体的なイメージを膨らませるために奥地が参考にしたのが、「フリースクール」だったのである。

そのようにして誕生した東京シューレの理念として、奥地は「自由」、「自治」、「個性尊重」を挙げている。しかし、「その三つをあらかじめ掲げたというより、子どもたちといっしょにやっていく日常の中でつくってきたものが、その理念であらわされる」(1992 : 135) と奥地は述べている。つまり、理念がつくり上げられていく過程にも、目の前の子どもたちと実践をつくり上げていく過程が密接に結びついているのである。

なお、この時期の著作における記述をみてみると、奥地は東京シューレを「学校の外の、子どもたちの学びと交流の場」(奥地 1989 : 65) であり、登校拒否の子どもたちの激増を受け、「理念や型よりも、子どもの現実の必要性に迫られて創った」(同上書 : 66) 場所であるとしている。この記述からは、登校拒否の子どもたちのために場を立ち上げたという成り立ちを重視して東京シューレを意味づけていることがうかがえる。

そこには、次のような奥地の当時の思いが込められている。奥地(1992)は、フリースクールと総称される場の成り立ちに注目し、不登校に関する親や市民の会がつくった場を「学校外の場」、外国のフリースクールの思想や実践に学び触発された人たちによってつくられた場を「フリースクール」と呼んで、両者を明確に区別している (pp.44-46)。ここから、「学校の外の場」という言葉には、不登校に関する親や市民の会がつくった場であることを示す意図があったことが分かる。他方で、外国の思想や実践の流れを汲む「フリースクール」も、実態は登校拒否・不登校の子どもたちが利用するケースが圧倒的に多く、考え方や行われていることにも共通性が高いことから、「実際的には二つの流れを分ける必要がなく」(同上書 : 46) とも述べている。

つまり、設立の経緯に着目すれば二つの流れに分けられるものの、実態においては両者を区別することは難しい。また、公教育との関係に着目すれば、従来のように公教育と対峙するだけでなく、公教育と連携したり、

公教育に参入したりするような事例も出てきている。これらを踏まえ、次項では社会の動向に合わせて変化してきたフリースクールにおける実践の変化の具体的な様相についてみていくことにする。

### 2-3. 社会の動向を受けたフリースクールにおける実践の変化

フリースクールに影響を与えてきた社会の動向は様々あるが、ここでは先行研究が扱っている動向に絞って論述し、詳細な検討は稿を改めて行う。

一つ目は、発達障害と診断された／疑いのある子どもの受け入れである。2003年に出された「今後の特別支援教育の在り方について」と、2005年に施行された「発達障害者支援法」の存在により、教育現場においても広く知られるようになった発達障害であるが、近年、発達障害と不登校を重複して呈する子どもへの支援が課題となっている（東山ほか2012）。発達障害のある不登校児に関して、遠藤（2013）は他者と同じようなリズムで行動することを強制されないフリースクールのほうがなじみやすいと指摘し、庄司（2013）は義務教育終了後の支援の場の一つとしてフリースクールを挙げている。また、藤村（2016）は、発達障害の子どもへの対応として医療機関等と連携している事例をフリースクールの「医療化」と捉えている。

二つ目は、進学への支援の高まりである。その背景の一つが、2003年に出された「今後の不登校への対応の在り方について」における不登校観の見直しである。この通知は、それまで「心の問題」として捉えられてきた不登校を「進路の問題」として捉え、将来の社会的自立を最終目標として掲げた（文部科学省HP）。また、2002年と2004年に行われた学校設置基準の大幅な規制緩和を受け、フリースクールも通信制高校と連携するようになった（阿久澤2015）。こうした変化を踏まえ、井上（2013）はフリースクールにおける学習支援の実態を描き、藤村（2014；2015）はフリースクールからの進学を子どもやスタッフがどのように意味づけているのかを明らかにした。

三つ目は、構造改革特区を利用した一条校の設立である。構造改革特区とは、2002年に公布された構造改革特別区域法により、実情に合わなくなつた国の規制について、地域を限定して規制を緩和することで、実現困

難な事業の実現を図る制度である（内閣府地方創生推進事務局 HP）。王（2011；2013）は、フリースクールが不登校特区<sup>8</sup>によって学校を設立するまでのプロセスと、設立された学校のカリキュラムについて明らかにしている。

なお、ここで留意しておきたいのは、実践に変化が生じたとしても、変わらず「フリースクール」として活動している団体が存在しているという事実である。これは、「フリースクール」という言葉が特定の実践を指示するものとして使われているのではなく、様々な実践を包括するものとして用いられていることを意味している。そして、このことは量的調査が指摘するフリースクールの多様性を解明するうえで、重要な意味をもつと考えられる。

### 3. 先行研究における日本のフリースクールの分析方法

本節では、先行研究がどのような手法を用いて、フリースクールを捉えてきたのかを明らかにしたうえで、その成果と残された課題について提示する。本稿の関心は質的研究にあるが、先行研究の全体像を明らかにするために、いったんすべての研究方法に視野を広げたうえで、改めて質的研究に戻るという手順を踏む。

#### 3-1. 分析対象の選定

本稿が対象とする先行研究とは、学会誌及び大学の紀要に掲載された論文を指す。その理由は、フリースクール研究者であり、かつ実践者であるというケースが少なくなく、雑誌論考や書籍を含めると、研究者と実践者の線引きが困難になるためである。

具体的には、論文検索サイト CiNiiにおいて「フリースクール」をタイトルに含む論文（2016年まで）を対象とし、「居場所」、「フリースペース」、「デモクラティックスクール」、「オルタナティブスクール」等、「フリー

<sup>8</sup> 正式名称は、不登校児童生徒等を対象とした学校設置に係る教育課程弾力化事業（特区番号 803）。

スクール」以外の学校外の場を指す語句を含む論文は対象外とした。ただし、タイトルには「フリースクール」という語句は含まれていなくても、論文中で「フリースクール」を扱っているものに関しては分析の対象とし、逆に「フリースクール」と冠していても、実践紹介のみの論文や、不登校または多様な教育機会確保法を主題とした論文は対象から外した。これらの作業の結果、合計 60 本の論文が抽出された（引用・参考文献リスト参照）。

### 3-2. フリースクールに関する先行研究における研究手法とその成果

次に、それぞれの論文を研究手法の分類にしたがって、質問紙調査、インタビュー調査、参与観察、文献等<sup>9</sup>の 4 つに分類した。なお、複数の手法を用いている場合は、併用している場合のみそれぞれカウントし、補完的に使用している場合には、主たる手法のみカウントした。

まず、質問紙調査を用いた研究としては、フリースクールを含む全国の学校外の場を幅広く調査したものとして、菊地・永田（2000；2001）、藤根・橋本（2016）、小桐間（2016）がある。いずれも複数の指標を用いて、フリースクールにおける多様な活動実態を描き出している。他方、舟橋（2012）は、北海道内の民間施設に対象を絞り、学校や行政等との連携を中心に分析を行っている。

インタビュー調査を用いた研究は、事実の聴き取りとして行われたものが多い。その中で、個別のフリースクールの変遷を扱ったものとして、森田（2007）、横井ほか（2010）、王（2011）などがあり、フリースクールにおける実践の変容とその背景を明らかにしたものとして、広域通信制高校との連携を扱った阿久澤（2015）、行政との連携に着目した武井（2016）などがある。他方、語りの解釈や意味づけに踏み込んだものとして、保護者・子ども・スタッフそれぞれの語りからフリースクールにおいて学習支援が立ち上がる過程を明らかにした井上（2013）、フリースクールからの

<sup>9</sup> ここには、ホームページに掲載された情報や Fonte（現不登校新聞）という専門紙も含まれている。その理由は、行政機関の管轄外にあるフリースクールに関する情報を公的資料から得ることは非常に困難であり、各フリースクールやネットワークが運営するホームページに掲載された情報や専門紙が重要な情報源となるためである。

進学に対する意味づけを扱った藤村（2014；2015）などがある。

参与観察を用いた研究では、個々のフリースクールにおける実践の詳細な記述やそれらの役割と意義を扱ったものが大部分を占める。具体的には、スタッフと子どもの関係性に着目した佐川（2009a；2010）や井上（2012）、演劇や農作といった特徴的な実践を取り上げた小林（2005；2006）や寺口ほか（2007）、経済的困難を抱える地域におけるフリースクールの役割と課題を明らかにした西原（2006）などが挙げられる。他方、フリースクールを俯瞰的に捉えたものとして、垣野が中心となって行った一連の研究

（2002；2004；2005；2008；2010）は、視察や行動観察を通してフリースクールの空間構造を明らかにし、豊田（1992）はフリースクール見学から得た示唆をもとに学校環境の改善に資する知見を提示している。

文献等による研究としては、全体を俯瞰したものとして、歴史的系譜を扱った坂本（2003）や田中（2016）、類型化を試みた沖田（1997b）や藤田（2002）などがある。また、日本独自の文脈に迫ったものとして、フリースクールを支える言説を解明した佐川（2009b）や竹中（2014）、フリースクールを支える教育思想を明らかにした竹中（2015）、フリースクールの不登校現象への影響を扱った田中（2015）、フリースクールの公教育化を批判的に考察した土方（2011）などがある。加えて、個別の事例に着目したものとして、教育行政との協働関係を扱った本山（2014）があり、海外のフリースクールと比較したものとして沖田（1997a）や吉田（2002；2004）がある。

### 3-3. 先行研究における残された課題

前節でみた各研究手法による成果は、表1のようにまとめることができる。

**表1 各研究手法による成果**

手法	成果
質問紙調査	実態の俯瞰／複数の指標を用いた多様な活動実態の描出／他機関との連携

インタビュー調査	各フリースクールの変遷／実践の変容とその背景／実践に対する解釈
参与観察	実践の詳細な記述／実践の役割と意義／空間的特徴の把握／学校環境の改善に資する知見の提示
文献等	歴史的系譜の解明／俯瞰的な特徴の把握／フリースクールを支える言説の解明／フリースクールを支える教育思想／フリースクールの不登校現象への影響／教育運動としての位置／教育行政との関係／フリースクールの制度化／海外のフリースクールとの比較

調査票調査と参与観察はそれぞれ目的に見合った成果が残されている。文献等による研究はマクロな視点からフリースクールを捉えると同時に、様々な切り口からフリースクールを捉えている。他方、インタビュー調査においては、特定の実践に視点が集中し、フリースクールを包括的に捉えるという視点が弱い。また、本稿の関心にひきつけて全体を見渡せば、「フリースクール」と称される場においてどのような実践が展開されてきたかは明らかにされているものの、何をもって「フリースクール」と称されているのかについては明らかにされていないことが分かる。本来であれば、語りを扱うインタビュー調査にその役割が期待されるが、既にみたように期待される役割を果たし切れていない。

しかし、一条校のような法的枠組みをもたないフリースクールを論じるにあたって、フリースクールにおいて主体となる人たちが何をフリースクールと意味づけているのかを明らかにすることは必要不可欠であり、個々のフリースクールを支える基盤を解明することにもつながると考えられる。次節では、そのために必要と考えられる視点と研究方法について論じる。

## 4. フリースクール研究の再考に向けて ——新たな視点と方法の提示

### 4-1. フリースクールという「経験」

ここまで、先行研究のレビューからそれらが果たした役割と残された課題について明らかにしてきた。そして、残された課題を解決するために必要だと考えられるのが、「経験」としてフリースクールを捉えるという視点である。

従来の研究は、フリースクールを「場所（空間）」として捉え、その全体像やそこで行われている実践について明らかにしてきた。しかし、フリースクールは、学校のようにあらかじめ存在し、一定年齢に達すると通うことが自明視されている場所ではない。むしろ、2節の東京シューレの事例でみたように、様々な条件が重なり合って生み出される。

また、フリースクールを「場所」として捉えることは、フリースクールがあたかも外部から切り離された空間であるかのような印象を与えてきた。だが、実際にはフリースクールに関わる人たちは一方で社会とつながりつつも、もう一方でフリースクールにもつながっている。その結果、フリースクールには様々な経験をもつ人が出入りし、多様な人との出会いが保障されるのである<sup>10</sup>。

さらに、最近の研究では、多様性や流動性からフリースクールを捉えようとするもの（南出 2016、田中 2016）が現れてきている。つまり、「場所」のように静的なものとしてフリースクールを捉えるのではなく、変動する動的なものとして捉えることが必要だとされ始めているのである。このような動向も踏まえつつ、本稿ではフリースクールを捉える新たな視点として、「経験」を提起したい。「経験」という言葉に着目するのは、次項で述べるナラティヴ・アプローチと密接に関連するためである。

<sup>10</sup> このような状況は、フリースクールにおける構成員の入れ替わりの激しさによって下支えされている。特に、子どもはいったん退会した子が期間を開けて再入会するケースも珍しくない。このことは、公教育において一度退学した学校には再入学しないことなどと比較すると、公教育制度の外側にある教育機関の特長が明らかになると思われるが、本稿ではこれ以上の検討は行わない。

#### 4-2. フリースクールを捉える新たな方法としてのナラティヴ・アプローチ

フリースクールを「経験」として捉えるために必要となるのが、フリースクールに関わる人がフリースクールをどのように語るかを明らかにする手法である。

J.S.ブルナーは、人間の思考様式として、一般的な諸原因とそれらの実証とを扱い、真理を求める「論理・科学的様式」(logico-scientific mode)と、人間の意図や行為、それらのなりゆきを解釈し、迫真性を求める「ナラティヴの様式」(narrative mode)の二つを提示した(Bruner1986:13/1998:19)。そのうえで、ブルナーはナラティヴを「経験の組織化」(organization of experience)と捉え(Bruner1990:55)、意味づけるという行為がもつ性質やその文化的形成と、意味づける行為が人間の行動において果たす中心的役割を強調した(ibid.:xii-xiii)。前項で提示した「経験」はこの意味で用いている。

ナラティヴとは、「語る」という行為と「語られたもの」という行為の産物の両方を指す言葉(野口2009、やまだ2007など)であり、出来事や経験をどのように解釈し、語る(語り直す)かが重視される。野口(2009)はナラティヴの反対語としてセオリー(theory)を挙げる。ここでは、具体性や個別性を抹消した一般的言明としてセオリーが捉えられ、他方、ナラティヴは経験の具体性や個別性を要件として成立するとみなされている(pp.5-6)。

ナラティヴには、「時間性」、「意味性」、「社会性」という三つの特徴がある。「時間性」とは「出来事の時間的順序を伝える」こと<sup>11</sup>、「意味性」とは「プロットを得ることで意味を伝える」こと、「社会性」とは「語り手と聞き手の共同作業によって成立する社会的な行為」であることを指す(同上書:9-10)。そのような特徴をもつナラティヴはこの社会に唯一無二のものとして存在しているわけではなく、様々な種類<sup>12</sup>があり、様々な

<sup>11</sup> 野口同様、リクール(1987:68-69)、アダン(2004:19,27)など、出来事の時間的秩序を重視する立場に対し、やまだ(2000)はその生成性を重視し、「2つ以上の出来事をむすびつけて筋立てる行為」と定義している(p.1)。

<sup>12</sup> 野口(2009)はその例として、(1)様々な物語を背後から正当化する「大きな物語」と「大きな物語」の支えなしに成り立つ「小さな物語」という時代の変化による区別、(2)ある状況を支配している「ドミナント・ストーリー」と「ドミナント・ストーリー」が効力を失ったときに代わりにあらわれる「オルタナティヴ・ストーリー」

ナラティヴを組み合わせることにより、社会的現実は成り立っている（同上書：18）。

フリースクールと密接な関係にあるとされてきた不登校という経験に関する研究においては、語るという行為、語るという行為の産物の両方が対象とされ、一定程度の蓄積がある。それらを分類すると、(A) 不登校経験者本人の語りを扱ったもの<sup>13</sup>、(B) 不登校の、あるいは不登校を経験した子をもつ親の語りを扱ったもの<sup>14</sup>、(C) 教員の語りを扱ったもの<sup>15</sup>、(D) 医師や民間の支援者の語りを扱ったもの<sup>16</sup>、(E) 不登校に関する語りを総体として扱ったもの<sup>17</sup>に分けられる。その中で、(A) 不登校経験者本人の語りを扱った研究には、貴戸（2004）や松坂（2010）、井倉（2016）のように、不登校という経験を時間軸で捉え、その後の人生においてどのように語り直されるかに着目しているものが存在する。

他方、前節でみたように、フリースクールに関する先行研究においては、語られたものを扱った研究は存在するが、その語りがどのように変化するかや、語るという行為自体には焦点が当てられてこなかった。

---

というフーコーの知と権力に関する議論に由来する区別、(3)個人が自分や自分の経験について語った「ファースト・オーダー・ナラティヴ」と主に研究者などが社会的世界を理解するために語った「セコンド・オーダー・ナラティヴ」という誰が誰について語るかによる区別、(4)語り手・主題・聞き手による分類を挙げている（pp.11-18）。

<sup>13</sup> 不登校は選択だとする居場所関係者の語りに対し、選択のみに限定されない当事者にとっての不登校の語りを扱った貴戸（2004）、不登校の受容や親による登校の促進、不登校経験に対する肯定的評価にみられる語りの差異について、ジェンダーの視点から分析した青田（2006）、不登校経験がその後の人生において自己資源化していく可能性を示唆した松坂（2010）、不登校経験と現在の生活状況に対する意味づけから、必要な支援のあり方を探った松井・笠井（2013）、生き方の一つとしての不登校という当事者固有の視点を提起した井倉（2016）などがある。

<sup>14</sup> 不登校の子どもをもつ親たちの学校に対する思いを相談員がまとめた大谷・倉石（2003）、親の会に関わる母親の語りを扱った松本（2003）、親の会に関わる父親の語りを扱った松本（2005）や加藤（2015）などがある。

<sup>15</sup> 柴田（2011）は、スクールカウンセリングにおける不登校事例へのナラティヴ・プラクティスを扱い、スクールカウンセラーと担任が発信した語りが、生徒を取り巻く新たなコミュニティを生み出していく過程を扱っている。

<sup>16</sup> 田中（2015）は、精神科医やフリースクール関係者などのさまざまな人びとの語りが相互に影響を与えながら、不登校像を変容させていった過程について明らかにしている。

<sup>17</sup> 山田（2002）は、不登校を語る際の「リプリゼンテイション representation の政治」を問題とし、抑圧されてきた人たちが語るかぎりにおいて、「不登校」や「教育」についての本質的な論議が可能になるとしている。

しかし、前項で提起したように、フリースクールを「場所」ではなく、時間軸を伴う「経験」として捉えるためには、語られたものを対象とするだけでなく、語ることを通して自己の変容を射程に入れたナラティヴ・アプローチが必要となる。やまだ（2000）によれば、物語としての自己は他者に向かって物語られる物語の中で形成され、物語の語り直しを通して生成的に変化する（pp.28-29）。つまり、フリースクールに関わる経験について語ることを通して、語り手は自己の物語を再構築する。そこでフリースクールとは、外在化された対象ではなく、語り手に内在したものである。このように、ナラティヴ・アプローチを用いることにより、フリースクールはそこに関わる人たちにとっての一つの「経験」として位置づけられる。

#### 4-3. フリースクール研究を再考するための新たな視点

##### ——まとめにかえて

では、フリースクールという「経験」の主体とその変容を分析しようとする場合、どのようなナラティヴを扱うべきなのだろうか。

その手がかりがイギリスのサマーヒル・スクールにある。サマーヒル・スクールは、設立者であるニイルの教育論を体現した場所として捉えられ、ニイルとサマーヒル・スクールを関連させて論じた書物や論文がイギリス国内外問わず多数存在する<sup>18</sup>。これに対し、日本のフリースクールに関しては先行研究が多数蓄積されているにもかかわらず、設立者の視点からフリースクールを読み解いた本格的な研究はいまだない。しかし、個々のフリースクールの理念を設立者の経験抜きに語ることは不可能であり、実践に関しても、本稿でみたように理念と密接な関係にある。したがって、設立者のナラティヴが一つの候補となりうるのではないだろうか。

加えて、先行研究との比較から、設立者のナラティヴに着目する理由を述べると、それは「当事者の意味づけ」を重視するためである。従来の語りを扱ったフリースクール研究は、「当事者の意味づけ」より、個々の実践がこの社会においてどのような意味をもつかを明らかにしようとす

<sup>18</sup> 山崎（1998）の作成したリスト（pp.356-362）をもとに、ニイルとサマーヒル・スクールを主題とした書物や論文及び記事を合算すると、国内外合わせて100にのぼる。

る傾向が強かった<sup>19</sup>。それに対し、筆者が設立者のナラティヴに目を向けるのは、個々の設立者が自ら立ち上げたフリースクールをどのようなものとして意味づけているのかを明らかにすることで、子どもにとつての意味が注目されがちなフリースクールを、大人の側から捉え返すことが可能になると考えるからである。

また、従来の参与観察を用いてフリースクールの現状を明らかにした研究では、視点が特定の期間に限定されがちであった。一定期間以上の時間軸を取り入れた研究としては森田（2007）が挙げられるが、森田が焦点をあてたのは、教育施策の弾力化に伴い、明確な教育理念をもつフリースクールの存続が困難になっていく過程であった。しかし、フリースクールの流動性を明らかにするためには、社会に主軸を置くのではなく、フリースクールに主軸を置き、フリースクールという「経験」を時間軸で捉えることが必要だと考えられる。その意図は、フリースクールを社会の影響を受ける客体として捉えるのではなく、社会との連続性に開かれつつも、必要に応じて社会に働きかけていく主体として捉えるところにある。もちろん、ナラティヴ・アプローチには時間性という特徴があるが、「出来事の時間的順序を伝える」という役割のみならず、フリースクールの設立から今後に至るまでの過去・現在・未来という長いスパンでフリースクールを捉えることにより、流動的なフリースクールのありようがより鮮明に浮かび上がってくるのではないかと考えられる。

以上の点を踏まえて、設立者のライフストーリーを分析することを通してフリースクールの多様性や流動性に迫りつつ、より包括的にフリースクールを描き出すことが今後の課題である。

## 引用・参考文献

阿久澤麻理子（2015）「広域通信制高校における学びを支えるフリースクール—後期中等教育の学習権保障の主体とは—」『人権教育研究』15：

<sup>19</sup> やまだ（2008）は、ナラティヴ・アプローチにおける「意味」の定義が研究者や研究目的によって異なることにふれ、「当事者の意味づけ」を重視するもの、「意味づける行為」を中心テーマとするもの、社会的構成や社会表象としてナラティヴを扱い、「社会的意味」を大きく捉えようとするものという三つの方向性を挙げている（pp.7-8）。

33-48.

- 青田泰明（2006）「不登校現象にみられるジェンダー問題—経験者の『語り』から—」『子ども社会研究』12：3-14.
- Bruner, J. S. (1986) *Actual Minds, Possible Worlds*. Cambridge: MA: Harvard University Press. 『可能世界の心理』田中一彦訳（1998）みすず書房.
- Bruner, J. S. (1990) *Acts of Meaning*. Cambridge: MA: Harvard University Press. 『意味の復権〔新装版〕—フォークサイコロジーに向けて—』岡本 夏木・仲渡一美・吉村啓子訳（2016）ミネルヴァ書房.
- 遠藤野ゆり（2013）「発達障害のある不登校児の集団への馴染みがたさについての現象学的考察—学校とフリースクールにおける共同性の違いに定位した研究方法論—」『法政大学キャリアデザイン学部紀要』10：131-155.
- 土方由紀子（2011）「フリースクールの公教育化についての検討—『多様化』言説の陥穰—」『奈良女子大学社会学論集』18：197-212.
- 藤村晃成（2014）「フリースクールにおける進路の選択過程—進学というメインストリームの呪縛—」『中国四国教育学会 教育学研究紀要（CD-ROM版）』60：48-53.
- 藤村晃成（2015）「フリースクールの子どもによる『進学』の意味づけ」『中国四国教育学会 教育学研究紀要（CD-ROM版）』61：43-48.
- 藤村晃成（2016）「『療育』の場としてのフリースクール」『教育学研究紀要（CD-ROM版）』62：453-458.
- 藤根雅之・橋本あかね（2016）「オルタナティブスクールの現状と課題—全国レベルの質問紙調査に基づく分析から—」『大阪大学教育学年報』21：89-100.
- 藤田智之（2002）「フリースクールの類型化と問題点」『佛教大学大学院紀要』30：93-107.
- 舟橋安幸（2012）「『フリースクール』における他職種連携の現状」『北翔大学生涯学習システム学部研究紀要』12：69-79.
- 東山弘子・近藤真人・木下幸典・宮崎薰（2012）「発達障害と不登校状態を重複して呈する児童に対する臨床心理学的支援の探索的研究」『佛教大学教育学部学会紀要』11：21-30.

- 北大不登校調査チーム（2012）「都市部における不登校者支援の現在—札幌市の支援行政とフリースクールへの調査から—」『公教育システム研究』11：65-100.
- 井倉未樹（2016）「不登校経験の語りをきく—当事者の経験の意味づけとその過程—」『神戸大学発達・臨床心理学研究』15：35-42.
- 井上烈（2012）「フリースクールにおける相互行為にみるスタッフの感情管理戦略」『フォーラム現代社会学』11：15-28.
- 井上烈（2013）「フリースクールにおける学習支援—学習支援ニーズの高まりと居場所づくり—」『教育・社会・文化研究紀要』13：17-32.
- 岩田弘志（2015）「1960年代アメリカフリースクール運動に関する一考察—A.S.ニイルの思想受容の意味—」『アメリカ教育学会紀要』26：24-36.
- 垣野義典（2008）「子どもとの関わりからみたスタッフの居場所特性—フリースクールの建築計画に関する研究（4）—」『日本建築学会計画系論文集』73(631)：1875-1882.
- 垣野義典（2010）「子どもの居方からみた空間特性—フリースクールの建築計画に関する研究（5）—」『日本建築学会計画系論文集』75(656)：2297-2305.
- 垣野義典・長澤泰（2005）「子どもの活動実態からみた空間構成要素—フリースクールの建築計画に関する研究（3）—」『日本建築学会計画系論文集』591：41-48.
- 垣野義典・須田眞史・初見学・長澤泰（2002）「子どもの自主活動の展開とスペースの使用状況—フリースクールの建築計画に関する研究（1）—」『日本建築学会計画系論文集』561：121-128.
- 垣野義典・須田眞史・初見学・長澤泰（2004）「子どもの交流様態と場の構造—フリースクールの建築計画に関する研究（2）—」『日本建築学会計画系論文集』580：25-32.
- 金子大輔（2002）「あるフリースクールの特徴的なICT利用を形成する要因—テクノロジーの導入と利用に対する学校の体制とスタッフの問題意識—」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）』48(2)：69-82.
- 加藤敦也（2015）「子どもの不登校に悩む父親たちの経験的語りについて

- 不登校の親の会に参加する父親へのインタビューを事例として—』  
『日本オーラル・ヒストリー研究』11：125-145.
- 貴戸理恵（2004）『不登校は終わらない 「選択」の物語から 〈当事者〉の語りへ』新曜社.
- 菊地栄治・永田佳之（2000）「オルタナティブ教育の社会学—多様性から生まれる 〈公共性〉—」『臨床心理学研究』38(2)：40-63.
- 菊地栄治・永田佳之（2001）「オルタナティブな学び舎の社会学—教育の 〈公共性〉を再考する—」『教育社会学研究』68：65-84.
- 小林久夫（2005）「回遊の道をうねうねと—演劇におけるフリースクール の意義と可能性—」『千葉大学日本文化論叢』6：89-68.
- 小林久夫（2006）「演劇教育における参加のエスノグラフィー—なぜ不登校だった生徒が舞台づくりに参加できたのか—」『千葉大学社会文化 科学研究』12：227-241.
- 小桐間徳（2016）「学校外教育施設の特徴を踏まえた評価の視点—フリースクール等に関する全国調査の結果を踏まえて—」『スクール・コンプライアンス研究』4：46-56.
- 久米博訳（1987）『時間と物語 I 物語と時間性の循環／歴史と物語』ボール・リクール、新曜社.
- 松井石根（2016）「教育産業多様化に関する一考察—不登校児童生徒の今 日的課題—」『日本産業経済学会産業経済研究』16：70-83.
- 松井美穂・笠井孝久（2013）「不登校経験者の不登校経験の意味づけとそ の影響—『問題』のとらえからみる支援のあり方—」『千葉大学教育 学部研究紀要』61：77-86.
- 松本訓枝（2003）「母親が語る『不登校』問題と対処—『親の会』における学習と相互作用過程—」『市大社会学』4：63-80.
- 松本訓枝（2005）「父親が語る『不登校』問題——親の会に参加する父親 を対象にして」『市大社会学』6：29-44.
- 松坂文憲（2010）「不登校経験者が語る “不登校経験の意味”～“自己資 源化の可能性”の提案～」『岩手大学大学院人文社会科学研究科紀要』 19：39-56.
- 南出吉祥（2016）「フリースクールの位置づけをめぐる教育実践運動の課

- 題」『〈教育と社会〉研究』26: 77-89.
- Montgomery, P. & Korn, C. V. *Free School—Reality & Dream*. unpublished. 『フリースクール・その現実と夢』大沼安史・吉柳克彦訳 (1984) 一光社.
- 森田次朗 (2007) 「現代日本における『欧米型』フリースクールの変容に関する社会学的考察—京都市における事例 Z をとおして—」『京都社会学年報』15: 169-184.
- 森田次朗 (2008) 「現代日本社会におけるフリースクール像再考—京都市フリースクール A の日常的実践から—」『ソシオロジ』53(2): 125-141.
- 本山敬祐 (2011) 「日本におけるフリースクール・教育支援センター（適応指導教室）の設置運営状況」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』60(1): 15-34.
- 本山敬祐 (2014) 「不登校対策における教育行政と『フリースクール』の協働形成過程—境界接続者概念に着目して—」『東北教育学会研究紀要』17: 15-28.
- 中野正大監訳 (2005) 『社会調査の考え方—論点と方法—』ティム・メイ、世界思想社.
- 西原尚之 (2006) 「『養護型不登校』における教育デプライベーション—補償教育システムおよび家族との協働の必要性について—」『社会福祉学』46(3): 87-97.
- NPO 法人東京シユーレ編 (2000) 『フリースクールとはなにか』教育史料出版会.
- 野口裕二 (2009) 「ナラティブ・アプローチの展開」野口裕二編『ナラティブ・アプローチ』勁草書房: 1-25.
- 生越達 (2013) 「集団内における重い気分の表明とその伝達—フリースクールでのエピソードから考える—」『学ぶと教えるの現象学研究』15: 19-28.
- 王美玲 (2007) 「不登校対策としてのフリースクールの可能性—フリースクールの理念と運営体制に関する事例比較を通して—」『社会分析』34: 189-203.
- 王美玲 (2011) 「フリースクールの学校化プロセスと展望—不登校特区への転換と教育理念の実践—」『やまぐち地域社会研究』9: 183-194.

- 王美玲（2013）「フリースクールの転換と不登校特区のカリキュラム」『やまぐち地域社会研究』11：15-26.
- 沖田寛子（1997a）「欧米と日本におけるフリースクールの比較研究—フリースクールの歴史と系譜をめぐって—」『社会分析』25：115-128.
- 沖田寛子（1997b）「不登校現象と子どもの『居場所』」『山口大學文學會誌』48：17-35.
- 奥地圭子（1989）『登校拒否は病気じゃない』教育史料出版会.
- 奥地圭子（1991）『東京シユーレ物語』教育史料出版会.
- 奥地圭子（1992）『学校は必要か 子どもの育つ場を求めて』日本放送出版協会.
- 大沼安史（1982a）『教育に強制はいらない』一光社.
- 大沼安史（1982b）『続・教育に強制はいらない』一光社.
- 大谷朗子・倉石哲也（2003）「不登校児の親からみた学校現場—相談員からみた不登校児の親の学校への思いの語り—」『臨床教育学研究』9：93-108.
- 佐川佳之（2006）「不登校経験について『語らない』ということ—コミュニケーション空間としてのフリースクールに関する一考察—」『一橋論叢』135(2)：258-278.
- 佐川佳之（2009a）「不登校支援における『秘密』の機能—不登校児の『居場所』・フリースクールを事例に—」『年間社会学論集』22：222-233.
- 佐川佳之（2009b）「フリースクール運動のフレーム分析—1980～1990年代に着目して—」『〈教育と社会〉研究』19：46-54.
- 佐川佳之（2010）「フリースクール運動における不登校支援の再構成—支援者の感情経験に関する社会学的考察—」『教育社会学研究』87：47-67.
- 佐川佳之（2014）「フリースクール運動をめぐる〈地図〉の粗描」『人間関係学研究』13：1-14.
- 坂本卓二（2003）「フリースクールの歴史—その存在意義と『教育の自由』についての考察—」『日本私学教育研究所紀要』38(1)：155-181.
- 坂田仰（2002）「フリースクールの現状と課題—不登校問題の一断面—」『日本女子大学紀要 家政学部』49：141-146.
- 柴田健（2011）「学校が『学校を利用する』という考え方を受け入れるまで

- ある生徒をめぐるナラティヴの変化—』『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』33：143-154.
- 相馬契太（2013）「不登校の捉え方と居場所の理解」『公教育システム研究』12：29-41.
- 末松壽・佐藤正年訳（2004）『物語論』 ジャン＝ミシェル・アダン、白水社.
- 庄司証（2013）「発達障がいのある生徒に対する支援機関としてのフリースクール～Chefoo International Christian School における中学校卒業後の生徒の場合～」『学校教育学会誌』18：37-44.
- 武井哲郎（2016）「不登校児童生徒への対応にフリースクールが果たす役割の変容—行政との連携による影響に着目して—」『日本教育行政学会年報』42：113-129.
- 竹中（井上）烈（2014）「不登校経験者へのメッセージとしての多様なライフストーリー—Fonteに連載された著名人インタビューを手がかりに—」『教育・社会・文化研究紀要』14：1-13.
- 竹中烈（2015）「不登校生の居場所ネットワーク設立者の実践及び教育思想に関する一考察—奥地圭子・八杉晴実・宮澤保夫の自著を手掛かりとして—」『愛知文教大学教育研究』6：31-40.
- 竹中烈（2016）「フリースクールにおけるスタッフ・子ども・親の『感情統制の三極関係』」『人間関係学研究』21(1)：89-99.
- 田中圭治郎（2002）「フリースクールの課題と学校の役割」『教育学部論集』13：85-99.
- 田中佑弥（2015）「『不登校』像の変容過程—精神科医、フリースクールに関わる人びとを中心に—」『臨床教育学研究』3：127-145.
- 田中佑弥（2016）「日本における『フリースクール』概念に関する考察—意訳としての「フリースクール」とその濫用—」『臨床教育学論集』8：23-39.
- 寺口由岐子・小林久夫・石田康幸（2007）「あるフリースクールにおける農的活動について」『埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』6：237-246.
- 徳留祐悟（2001）「フリースクールの実態と課題」『佛教大学大学院紀要』

29 : 145-158.

特定非営利活動法人フリースクール全国ネットワーク（2004）『フリースクール白書　日本のフリースクールの現状と未来への提言』特定非営利活動法人フリースクール全国ネットワーク。

豊田昌利（1992）「学校改善の方策を求めて—フリースクール的視点から—」『鳴門生徒指導研究』2 : 80-90.

やまだようこ（2000）「人生を物語ることの意味——ライフストーリーの心理学」やまだようこ編著『人生を物語る』ミネルヴァ書房 : 1-38.

やまだようこ（2007）「ナラティヴ研究」やまだようこ編『質的心理学の方法　語りをきく』新曜社 : 54-71.

やまだようこ（2008）「人生と病いの語り」やまだようこ編『質的心理学講座2　人生と病いの語り』東京大学出版会 : 1-12.

山田潤（2002）「『不登校』だれが、なにを語ってきたか」伊藤茂樹編著（2007）『リーディングス日本の教育と社会 第8巻　いじめ・不登校』日本図書センター所収 : 255-271.

山崎洋子（1998）『ニイル「新教育」思想の研究—社会批判にもとづく「自由学校」の地平—』大空社.

横井敏郎・宮盛邦友・市原純・石田守克・佐渡かおり・市川剛章・中村太一（2010）「公教育制度を問い合わせるフリースクール—札幌自由が丘学園の調査—」『公教育システム研究』9 : 61-99.

吉田重和（2002）「フリースクールにおける自治システムの役割と意義—日本と英国の事例から—」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊』10(1) : 1-11.

吉田重和（2004）「複線化する日本におけるフリースクールとメインストリームとの関係性—イギリストタイプからオランダタイプへ—」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊』12(1) : 203-213.

吉井健治（1999）「不登校を対象とするフリースクールの役割と意義」『社会関係研究』5(1・2) : 83-104.

吉井健治（2004）「フリースクールと学校教育の連携に関する一考察—沖縄のフリースクールへの参加観察を通じて—」『社会福祉研究所報』32 : 295-304.

鷺頭豊（2012）「フリースクールを読む—『学校』拒否の背景と新たな『教育の』模索として—」『地域社会研究』5：86-90.

#### 引用・参考ホームページ

一般社団法人日本発達障害ネットワーク HP <https://jddnet.jp/> (2018.1.11)

文部科学省 HP <http://www.mext.go.jp/> (2018.1.11)

内閣府地方創生推進事務局 HP

<https://www.kantei.go.jp/jp/singi/sousei/index.html> (2018.1.11)

通信制高校ナビ HP <http://www.tsuushinsei-navi.com/> (2018.1.11) .

## Possibility of the Narrative Approach in the Free School Study: For a Study in Consideration of Variety and Fluidity

HASHIMOTO Akane

The purpose of this paper is to consider the methods for the study of free school and to get the new point of view for future studies through analyzing critically the articles about the concept of free school.

At first, I surveyed the preceding studies on the process of the spread of a concept of the free school and how it has been used. I found that the concept had spread through books which introduced the examples of free school in Europe and America and through seminars on free school. As a result, the term is lightly used by people who actually work with children.

Then, I classified the preceding studies of free school based on their methods. The finding revealed that the field of study in qualitative researches are limited compared to the quantitative survey and studies using documents. In addition, these studies show what kind of practices take place in so called free school, but do not define what is free school.

To solve this problem, this paper presents narrative approach as a new viewpoint of experience to grasp what is free school in terms of variety and fluidity for the future free school study.